

---

# 素顔

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

素顔

### 【Nコード】

N9370B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

剛勇無双の横綱赤龍。彼は盲目の娘に勝利と出会いを約束する。しかし己の怖い顔を知る彼は彼女に顔を見せることを恐れる。どうするべきか迷うが遂には。

## 第一章

### 素顔

赤龍は最強の横綱と謳われていた。巨体と怪力、そのうえ多彩な技を誇りあの大鹏に勝るとも劣らないとまで言われる程の強さを誇っていた。

双葉山以上とも言われる。そこまでの圧倒的な強さを今誇示していたのであった。

その彼の顔は非常に怖い。眼光鋭く目は釣り上がり鬼の様な顔をしている。そんな彼の顔を見て母親が子供達に言ったりするのだ。

「いい子にしないと赤龍関に怒ってもらいますよ」

と。それで皆ピタリと収まる。彼はそこまで怖い顔をしているとされていたのである。

そんな彼であるが人気は高かった。圧倒的な強さとその謙虚な性格で意外と皆から好かれていたのである。今日もモンゴル出身の豪遊無双の力士と闘って寄り切りで倒したところである。

「いやあ、結構結構」

相撲協会の偉いさんが勝負の後で彼に対して上機嫌で声をかけてきていた。

「よくあれで勝ったものだ」

「はあ」

人相の悪い老人である。とある業界の大物であるがそのあまりもの横暴と暴言で敵を非常に多く抱えている人物である。世間では彼を忌み嫌い北朝鮮の国家元首の様に言っている。そうした下劣な人物が今赤龍に声をかけてきていたのである。

「見事見事」

「勝負ですから」

赤龍は素っ気無くそう返すだけであった。

「別にそれは」

「勝っても嬉しくないのかね」

「嬉しいっす」

それには頷いてきた。だが態度は素っ気無い。

「それは本当です」

「ではもつと喜んだらどうかね」

「はあ」

また何か力のない返事を返す。

「折角外国人の力士に勝ったんだからね。もつとこう」

「あの爺」

「また言いやがったな」

周りにいるマスコミ関係者達が老人の言葉にすぐ反応してきた。この男は暴言が非常に多くそれが為に日本中に敵を抱えているのである。ある騒動の時にはこうした時こそ十四歳以下の出番だと言われていたし批判するサイトも多い。ある週刊誌の嫌いな人間のトップに輝いたこともあれば死ねば日本中で大祝賀会が開かれるとまで言われている。およそここまで嫌われている人間は他にはいない。こうした人物が大手を振って歩いているという怪奇現象が起こっているのもまた日本の問題点であるのだが。

「そう思わんかね」

「いえ」

しかし赤龍はそれには首を横に振ってきた。

「そうは思わないです。彼は立派な力士です」

「外国人でもか」

「それは関係ありません」

そうはつきりと言ってきた。

「土俵に上がれば皆同じです」

「しかしだね」

「私はそう思います」

老人にそれ以上言わせなかった。強い言葉であった。  
「違いますか」

「おいおい」

「爺さんも横綱には勝てないってか」

マスコミ関係者達はそのやり取りを面白そうに眺めていた。この老人は万人に忌み嫌われている。彼がへこまされる話は誰もが望んでいるのである。だから面白そうに眺めているのだ。

「しかしだね相撲は我が国の」

「それでもです」

赤龍はまたしてもきっぱりと言い切った。

「私には相手が誰であれ構いません。強くて尊敬できる相手なら」  
「ううむ」

「それだけです。外国人とかそういうのは何の問題もありません」  
そう言つて老人を黙らせてしまった。傍若無人で知られる老人ですら黙らせてしまったのであった。

「わかった」

老人は慚然として頷いてきた。というよりは頷くしかなかった。

「そういうことだな」

「そうです。では」

「待ちまたえ」

また老人は彼を引き止めてきた。

「まだ何かあるんでしょうか」

「これから付き合わんかね」

彼は料亭好きで知られている。そこでの密談を常に行っているのだ。本来はそうした料亭での密談を批判するべき立場にいる筈なのに自分がそれをしている。何処までも陰険で腐り果てた人間なのである。

「美味しいものでも食べながら」

「いえ」

赤龍はそれも断つてきた。やはり言葉は毅然としていた。

「もう約束がありますので」

「約束とな」

「はい、親方達と」

そう言つて彼の話を受けようとしな。これは本当のことなので断るには充分であつたのだ。

「そういうことですので。じゃあ」  
「くつ」

老人は彼が去つて行くのを忌々しげに見送るしかなかった。憂さ晴らしに葉巻を取り出す。なおここは禁煙であるがそれでも構うところはない。

「帰るぞ」

火を点けさせて周りの者に声をかけた。

「えっ」

「帰ると言つたんだ、馬鹿者が」

「は、はあ」

周りのマスコミ関係者の侮蔑しきつた視線にはもう気付いていた。だから余計に忌々しかつた。

腹立ちまぎれにその場を後にする。マスコミ関係者はその愚かで無様な姿を侮蔑した笑みで見送りながら話をしていた。

「いい記事になるな」

「全くだ」

彼等は口々にこう言い合つた。

「あの爺さんの人種差別発言か」

「その後での密談への介入」

これだけで記事になる。叩かれるには充分であつた。

「ちゃんと映像にも取つてるぜ」

テレビ局のスタッフが言つてきた。

「おお、そうか」

「ここ禁煙なのに葉巻吸うところもな」

「いいねえ」

「じゃあ放送だな」

「記事にも書いて」

あの老人に関することならそうして書かれていくのだ。元々人望

も何もなく自身の社内でも北朝鮮の独裁者の様な有様であるので誰も何も言わない。愚劣で醜悪な裸の王様というわけである。

「こりゃ売れるな」

「全くだ。いい記事になるな」

こうして老人と赤龍に対する記事が出来上がった。老人は薄汚い人種差別主義者という烙印も押され赤龍はそれを否定し相手を尊敬する真の横綱となった。大々的なスクープとなり老人の会社には抗議の電話やファックスが殺到した。あまり物凄さに仕事にならない程であった。

『くたばれ爺！』

『御前なんざさつさと地獄に行け！』

『角界の金正日が！』

そうした言葉が殺到していた。社員の中にはノイローゼ気味になる者までいた。この老人の立派な人望のおかげである。

「全く、何ということだ！」

老人は自社の社長室でその魔女の様に陰険な顔をさらに歪めさせていた。

「俺が何をした！何故あいつばかりが！」

こんなものだから批判されるとは思っていないのが実に素晴らしい。

「忌々しい！俺が何でいつも叩かれなくちゃいけないんだ！」

「そんなだからだよな」

「おい、聞こえるぞ」

部下達はそんな彼を見て囁き合う。彼は当然ながら部下に対しても暴君である。逆らえば何をされるかわからない。まさに將軍様なのである。

「社長、それで」

「何だ！」

部下の言葉に吼える。なおこれで八十歳である。無駄に元気で長生きしていると世間に言われている。間違いなく日本で一刻も早く死んでもらいたい人間のナンバーワンである。

## 第二章

「抗議の電話が殺到して仕事にならないのですが」

「会社の人間があちこちで言われているそうです」

「糞っ」

吼えるしかできなかった。自業自得である。唯一の解決方法は彼がいなくなることだが異常なまでに自意識が肥大しているのもうした発想はないのである。なおこの男はこれから暫く後に収賄と買収の罪で実刑判決を受け社会的に破滅することになる。その末路は実に悲惨極まりなかったという。自業自得、因果応報と言うべきか。そんな調子で彼は日本中の義憤を買っていた。だが赤龍は多くの者の賞賛を受けていたのであった。

「凄いぞ、おい」

親方が部屋で彼に声をかけていた。

「御前も凄いこと言っただな」

「そうでしょうか」

新聞を手に畳の部屋で向かいに座る親方。それに対して赤龍は正対して座っていた。二人共胡坐をかき着物を着ていた。

「そうでしょうかって御前」

親方はぶっきらぼうな言葉を口にした彼に対して言った。

「あの爺にあんなことは言えんだらう」

「やっぱり間違つてると思いましたが」

彼はまたそういったふうなぶっきらぼうに返した。

「だから言っただんです」

「怖くはなかったか」

「怖い？」

親方のその言葉には目をパチクリとさせた。

「そつだ。あの爺は金と権力だけはあるからな」

はつきり言えばそれだけしかない。人望も魅力も人格も人徳も一



切ない。醜悪で下品な独裁者そのものである。またその金と権力であからさまにやりたい放題をしているから天下の義憤を買うつとすらわかつてはいないのが実に滑稽である。

「それに向かうなんてな」

「金と権力なんて意味ないですから」

赤龍にとつてはその二つはどうでもいいことであつた。だから言えるのである。

「俺には」

「そうなのか」

「はい」

親方に対してこくりと頷いてきた。

「じゃあ何が怖いんだ？」

「自分です」

彼は真面目な顔で言つてきた。その恐ろしい顔がさらに恐ろしく見える。

「自分か」

「やっぱり慢心したりとか油断したりとか。そういうのが一番怖いです」

「ふうむ」

親方はその言葉を聞いて腕を組んだ。そのうえで感心したように唸るのであつた。

「そうか、自分がか」

「やっぱりそうです」

「その言葉、そうは言えないぞ」

そう述べて唸るしかなかった。

「赤龍」

そのうえで彼の名前を呼んできた。

「御前はやっぱり凄い奴だ」

「別にそうは」

「そう考えていること自体が凄いんだ」

相変わらずの様子の彼に対して言う。

「いいか」

「ええ」

「その心、忘れるな」

彼はそう横綱に言っただけで聞かせた。

「自分の悪い心を卑しむその心があればな、何でもできるんだ」

「何でもですか」

「そうだ」

親方もまた強い声になっていた。

「人を救うことだっただけで。できるんだ」

「ちよつとそれは」

赤龍はその言葉にはその怖い顔を顰めさせて親方に応えた。

「ないんじゃない。俺は力士ですよ」

「何言ってるんだ」

だが親方はそう言った赤龍にかえってこう言い返した。

「力士だからなんだよ」

「闘うしか出来ないじゃないですか」

「あんな」

親方はさらに言う。

「力士は何だ？」

そして赤龍に問うてきた。

「何だっただけで言われましても」

「神主さんの親戚みたいなものだろうが」

「ええ、まあ」

流石に横綱でそれを知らないわけがなかった。だがそれに対する赤龍と親方の考えが違っているだけである。

「だからだよ」

「神様にお仕えしてるってわけですか」

「そういうことだ。じゃあできるな」

「そうですね」

「特に御前みたいな力士はな」

親方の声はさらに強いものになってきていた。

「できる。安心しろ」

「だいいですけれどね」

今回ばかりはどうにも親方の声が信じられなかった。これは無理もないことであつた。

「俺みたいなのが人を助けることができれば」

ふと自分の顔のことを考える。この顔のせいで昔から怖がられてきている。天下無双の横綱も自分の顔のことはどうしようもなかったのである。

親方の言葉が頭の中に残るが彼は稽古と勝負に明け暮れていた。稽古には実に熱心で土俵での勝負では常に勝ち続けた。まさに鬼神の如くであつた。

実際に彼は鬼とも呼ばれていた。その根拠はやはりその顔である。顔があまりにも怖いのでそう言われるのだ。子供の頃からなにもう慣れてはいるがやはり気分のいいものではなかった。

「赤龍、また勝つたな！」

「鬼みたいな強さだったな、今日も！」

土俵を降りて花道を進む彼にこう声がかかる。これもまた彼に対する声援であつた。

「あの、横綱」

その中で付き人の一人が彼に声をかけてきた。

「どうした？」

「あのですね」

彼は花道から出た赤龍にそつと囁きかける。赤龍もそれを聞く。

### 第三章

「実は横綱に会いたいつて人がいまして」

「俺にか」

「はい」

付き人は答える。

「どうしますか？」

「どうしますかって言われてもな」

いきなりの話なのでまずは何と言つていいかわからなかった。それでとりあえずはこう述べた。

「とりあえずな」

「ええ」

「部屋に戻ろう。話はそれからだ」

「わかりました。それじゃあ」

「ああ」

こうしてまずは部屋に戻った。そして着替えたところで詳しい話をその付き人から親方と一緒に聞くことにした。

「それでな」

「はい」

彼はその付き人にくつろいだ様子で尋ねてきた。

「何処の誰なんだ、それは」

「横綱のファンの人らしいんです」

「サインか？」

すぐにそれに考えを至らせた。

「それともタニマチになりたいつて人か」

「いえ、それが」

だが付き人はその言葉に対してどうにも難しい顔を見せてきた。

「普通の人なんですよ」

「そんなのは殆どの人がそうだろうが」

親方は何かピントがずれた言葉を言ってきた。

「怪人とかに変身するわけじゃあるまい」

「親方、それは幾ら何でも」

付き人もその言葉には何と言っているのかわからなかった。

「せめて相撲だったら妖怪とか」

「どっちにしろ同じじゃないか」

親方はそう言ってそれを問題にはしようとしないう。

「それで何になるんだ？ロブスターか？それとも鶴か？」

「親方、テレビの観過ぎなんじゃ」

それを聞いて赤龍も言った。

「どうも日曜の朝早いと思ったら」

「まあ気にするな」

「はあ」

親方はそれに関してはかなり強引に終わらせてきた。そして話を再開させる。

「それでだ」

「はい」

付き人はそれに応える。

「その人ここに連れて来い。ただしな」

「ええ」

「ヤクザ関係じゃなかったらな。それは気をつけるよ」

「わかってますよ」

ここの親方はそうしたタニマチはお断りであった。よくある話だがこうしたスポーツや格闘技の世界ではその筋の人間が関わっているのである。簡単に言うとな芸や風俗と同じで金になるからだ。かつての野球での選手の獲得交渉や札の売り買いにはかなり積極的に関わっていたという。相撲でもこうした話がどうしてもついて回るのだ。

「じゃあこちらにお連れしますね」

「ああ」

こうしてその人が呼ばれることになった。付き人が去ると親方はあらためて赤龍に顔を向けて声をかけてきた。

「誰だと思う？」

「少なくとも妖怪じゃないですよ」

「そんなのはわかっとなるわ」

話はそこに戻ってしまっていた。これは親方にとっては不本意な話であつた。

「今頃それどころじゃないだろうが」

「一度妖怪と勝負してみたいって思ったりもしますけれどね」

「いい心掛けだ」

親方は彼のその言葉には笑ってみせた。

「流石は横綱だけはあるな」

「はい」

「妖怪でも怪人でもな。力士は邪気を追い払うのがそもその仕事だしな」

「ええ」

土俵で四股を踏むのはこうした理由からである。

「まあそれは実際に来たらだ」

「ですね」

そもそも来たら怖いというレベルではないのであるがそれは話には出なかった。

「じゃあ誰が来るかだな」

「その筋だつたらお引取りつてことですね」

「うむ」

付き人に話したのと変わらない話をしながら待っていた。すると付き人がある若い女の人と小さな女の子を連れて部屋に戻って来た。女の子の歳は六歳か七歳といったところであろうか。赤い服を着ている。可愛い顔立ちだがどういいうわけか動きも頼りなく目も焦点が合っていない感じであつた。

「はじめまして」

見れば長い黒髪を上で束ねている。若いことは若いのだがどうにもくたびれた感じがする。服も全体的に地味で目立たない印象だ。女の子の手を強く握っているのが目につく。

「赤龍関さんですよね」

「はい」

赤龍はその女性の言葉に応えた。

「そうですね」

「そうですね」

赤龍は女性がその言葉を聞いてほっと胸を撫で下ろしていることに気付いた。だがそれはあえて口には出さず彼女の言葉を待っていた。

「それで私に何の御用でしょうか」

赤龍はその女性に問う。

「よかつたら教えて下さい」

「宜しいですか」

「はい」

女性の言葉を受け入れて頷く。

「どうぞ」

「わかりました。では」

「まあお座り下さい」

親方も彼女に声をかける。見ればまだ立っていた。

「ゆつくりとお話しましょう」

「ええ。さあ美香子」

手を握っている少女に声をかけてきた。

「座りましょう」

「わかったわ」

少女はそれに頷く。そして女性に言われるまま座ろうとする。彼女もそれを見て座るのであった。

「ではお話下さい」

親方が穏やかな声であらためて彼女に声をかけた。

「どういった御用件でしょうか」

「ええ」

女性はそのを受けて口を開きはじめた。二人は正座していた。

「まずは私の名前ですが」

「はい」

赤龍も親方もまずは名前を聞いた。

「棟方富子と申します」

「棟方さんですか」

「はい、主人は銀行員でして」

「成程」

ここまでは普通の話であった。何も変わったところはない。

「そしてこれが娘の美香子です」

富子はそう言って少女を紹介した。その間もずっと手を握って話さない。

「娘さんでしたか」

「はい。実は今日はその娘のことをお願いがあつてお邪魔させて頂きました」

「ふむ」

親方はそれを聞いて考える目を見せてきた。

「左様でしたか」

「そうですね。娘は」

「どうされたのですか？」

今度は赤龍が彼女に尋ねる。

「目が見えないのです」

「目がですか」

「はい、病気で」

富子は沈んだ声でそう答えてきた。

「見えなくなつたのです。三歳の時から」

「そうだったのですか」

赤龍はそれを聞いて納得したように頷いた。だから今も手をじっ



と握って離さないのだとわかった。これは母親だからであったのだ。娘を氣遣う親心であったのだ。

「それですね」

富子はさらに言ってきた。

「今度手術することになりました」

「手術をですか」

「そうなのです。けれど娘が怖がりまして」

富子は語る。語りながら赤龍に顔を向けてきた。よく見れば母娘であるとはよくわからせるものであった。その顔立ちがよく似ていた。だがやはり違うものがあった。それが目なのであった。悲しいことに。

「それで。娘が赤龍関のファンでしたので。こうして勇気付けてもらおうと思ひまして」

「そういうことでしたか」

「はい」

富子は赤龍の言葉に応えた。その返事には何の曇ったものもなかった。

「宜しいでしょうか」

「勿論です」

赤龍は迷うことなくその申し出を快諾してきた。太く低い声で答えてきた。

## 第四章

「そちらのお嬢ちゃんですよね」

「そうです」

富子は答える。

「さあ美香子」

娘に声をかけてきた。

「赤龍関に挨拶しなさい」

「うん」

声を聞いて頷く。仕草に見るといつもものがないところからやはり目が見えないのだということがわかる。

「横綱ですよ」

「そうです」

赤龍は優しい声でそれに答えた。その恐ろしい顔からは想像もできない程穏やかで親切な声になっていた。

「横綱のファンだそうだね」

「はい」

声を聞いて赤龍に顔を向けて答えてきた。

「そうです」

「そうか。いつも横綱の試合を聞いていてくれるんだね」

「そうです。それで今度手術することになって」

彼女自身もそのことを口にする。だがここで声が少し震えたことから怖いという気持ちもあるのがわかる。

「それで横綱に勇気を貰いたくて」

「そうだったのかい」

「この娘が是非にと言ったので」

富子がまた言ってきた。

「それでだったんです」

「いい話だな」

親方は二人の話を聞いて感動したかのように頷いていた。

「そう思うだろ」

「ええ」

赤龍もそれに頷く。本当にそうだと心の奥底から思っていた。

「だからだ」

親方はまた言ってきた。

「わかるな」

「はい。美香子ちゃんだったね」

「うん」

美香子はその言葉に頷いてきた。

「横綱も勝負に頑張るからね。美香子ちゃんも手術を受けるのを頑張るんだぞ」

「わかったわ。それでね」

「何だい？」

ここで美香子は言ってきた。そして赤龍もそれを受ける。

「手術が終わったら」

「何かあるのかい？」

彼はこの時美香子が何と言うか考えてはいなかった。ましてやそれが彼にとつては非常に辛いことであるということなぞ考えられる筈もなかった。

「また横綱のところに来ていいかな」

「いや、それには及びません」

しかしここで親方が言ってきた。

「こちらから病院にお伺いします。お母さん、それで宜しいでしょうか」

「いいのですか、それで」

富子は親方のその言葉を聞いて驚きを隠せなかった。

「あの、それですと」

「何、構うことはありません」

親方はどっしりとした笑みを彼女に向けて言ってきた。

「そちらに御足労をおかけするよりは。鍛えてある我々の方がいいというものです。そうだな」

「はい」

赤龍もその言葉に頷く。全くその通りだと思った。

「そういうことです」

「左様ですか」

「ええ」

二人は同時に富子に答えた。やはり安定感のある、話を聞く者を安心させる声であった。

「是非こちらから」

「出向かせて頂きますので」

「それでしたら」

富子もそれを受けることにした。こくりと頷く。

「横綱」

美香子も赤龍に声をかけてきた。

「何だい？」

赤龍は穏やかな声でそれに応える。その言葉にはあの無敵の横綱の姿はなかった。

「私、手術受けます。頑張ります」

「うん、頑張つて」

そう彼女に言う。

「きつとだよ、いいね」

「はい。それでですね」

彼女はあることを提案してきた。

「二つお願いがあるんですけれど」

「お願い？」

「はい」

そう言ってからこくりと頷いてきた。

「二つあるんです」

「何だい、それは」

「聞いてもらえますか？」

「うん。よかったら言って」

言ってもいいと述べた。美香子はそれを聞いて述べてきた。

「わかりました。手術の日の勝負ですけど」

「うん」

「勝って下さい」

彼女は言ってきた。

「私も頑張りますから横綱も頑張ってください」

「わかったよ」

赤龍は笑顔でその言葉に応えた。鬼の様な顔が優しく綻んでいた。

「絶対勝つから。それは任せて」

「お願いします」

まずはそれは受けることができた。彼としても敗れるつもりはない。何があっても勝つつもりになった。

しかし願いはそれだけではない。もう一つあるのだ。それは何だろうか。赤龍はそれを考えながら美香子の話を聞き続けたのであった。

「それで二つ目ですけど」

「今度は何かな」

やはり穏やかな声で応える。

「はい。目が見えるようになったら」

「目が見えるようになったら？」

「私、横綱の顔を見ていいですか？」

「えっ」

その言葉を聞いた時赤龍の表情が一変した。

「今何て」

「ですから」

美香子はまた言ってきた。

「横綱の顔、見ていいですよ。目が見えるようになったら」  
「うっ、うん」

赤龍はそれを言われて急に態度がよそしくなった。何か不都合があるようにさえ見える。

「いいよ」

「そうですか。じゃあ」

「有り難うございます、横綱」

美香子は笑顔になる。富子も同じだ。赤龍はそんな二人の顔を見てもう何も言うことができなくなってしまった。

「それでは私共はこれで」

「横綱、きつと目が見えるようになりますから」

美香子は笑顔のまままた赤龍に言ってくる。

「その時にまた」

「会おうね」

「はい」

こうして二つの約束が為された。赤龍は勝負に勝つことと会うことが決まった。だが彼はこのことに対してどうしても困ったことがあった。

「親方」

彼は親子が帰った後で親方に声をかけてきた。

「どうしましょう」

「どうしましょうっておい」

親方は赤龍が珍しく弱気な顔を見せてきたので驚かずにはいられなかった。それで彼に問うた。

## 第五章

「何言ってるんだ、御前も」

「いえ、さっきの話ですけれど」

彼は困った顔で述べる。

「顔見せて欲しいって」

「それがどうしたんだ？」

「この顔ですよ」

そう言っつて自分の顔を指し示して言う。

「やっぱり。あれですよ」

「見せたら困るのか」

「こんな怖い顔ですから」

肩を小さくさせていた。本気で気にしているのがわかる。

「やっぱり。あれですよ」

「そんなこと気にするな」

だが親方は彼にそう言う。

「顔は生まれつきだからな」

「それはそうですけれど」

「大体御前今まで自分の顔についてとかく言ったことはないじゃないか」

親方はそれを指摘してきた。

「そうじゃないのか？」

「ええ、まあ」

それは認める。しかしだ。

「それでも今度は」

「心配か」

「はい」

その言葉にこくりと頷く。

「小さな女の子ですからね。やっぱり」

「御前がそんなに心配性だったとはな」

親方はそんな言葉を聞いていてかえって意外にすら思った。

「思いもしなかったぞ」

「ですか」

「そうだよ」

そう言葉を返す。

「とりあえずは最初の約束を果たすんだな」

「勝負に勝つことですか」

「まずはな」

親方はそれを勧めてきた。それは正しい言葉であった。赤龍もそれに従うことにした。

「じゃあ」

「ああ、まずはそれだよ」

またそれを勧める。

「わかったな、それで」

「わかりました」

まずはその言葉に頷いた。頷くしかないのはわかっていた。

「まずは勝ちます」

「そうだ」

親方はその言葉を聞いてにこりと笑った。決めるかのようにこう言ってきた。

「勝ってあの娘の病気も治してやれ」

「邪気を払ってですね」

「そうだ、御前は横綱だからな」

力士は神儀と縁が深い。それも横綱ともなればかなりのものとなっている。親方は彼にそれを言ってきているのである。

「思う存分払って来い」

「やります」

赤龍はその言葉に元気付けられた。まずは勝負に向かうように進められたのであった。



「それを」

「よし、じゃあ今から帰って稽古だ」  
「ええ」

彼は無類の稽古好きでもある。だから横綱にまでなれたのだ。努力家でもありその面でも高く評価されている。

「勝つ為にな」

「あの娘の為に」

二人は言い合う。美香子の為に勝つことにしたのだ。まずはそれからであった。

試合が近付くにつれ気持ちがちがそちらに向かっていく。彼は他の試合も勝ち続け遂に美香子の手術の日の勝負となったのであった。

「いよいよ今日だな」

親方がその日の朝声をかけてきた。

「用意はいいか」

「勿論です」

赤龍は朝の稽古を終えた後であった。その場で彼に応える。

「何時でも」

「そうか。その言葉忘れるなよ」

「はい」

赤龍はこくりと頷いた。そして夕方の試合の為に土俵に向かう。その中の車で隣に座る親方がまた言ってきた。

「あの娘の手術の時間な」

「何時ですか？」

「五時半からだ」

「それじゃあ」

彼はそれを聞いてすぐにわかった。

「丁度勝負の時ですね」

「そうだ。だからな」

親方はさらに言う。

「御前が勝ったその力がすぐに手術を受けているあの娘に行くんだ」

「そうですね」

それは彼にもわかる。何かそれを聞いてかなり勇気付けられる。

「じゃあ何があっても勝ちます」

「その意気だ」

親方もその言葉に頷いてくれた。

「何があってもだ。いいな」

「ええ。何があっても」

相手のことは考えるな。勝つことだけを考えろ」

親方はこうも言う。何もかも美香子のことを考えた言葉であった。

「いいな」

「ええ。勝ちます」

赤龍はまたその言葉に頷いてみせた。強い言葉になっていた。

「絶対に」

そう決心しながら土俵に向かう。身体を慣らしているうちに勝負の時間が近付いてきていた。

「もうか」

五時半だ。美香子の手術が行われる時間である。

「いよいよだな」

彼女の手術が始まる。そして彼にも。

「おい」

親方が声をかける。彼もそれに応える。

「ええ、じゃあ」

「勝って来い」

それだけであつた。だがそれだけで充分であつた。

「わかつたな」

今度は無言で頷いた。部屋を後にし土俵に向かう。彼は土俵に向かいながら心の中で美香子に対して語り掛けていた。

（美香子ちゃん、頑張るんだ）

手術を受ける美香子に言葉を送る。

（俺も勝つから）

土俵に向かう。今は相手のことは見えてはいなかった。

見えているのは美香子のことだけだった。それを見据えて今土俵にいた。

勝負のことは頭に残ってはいない。気付けば軍配が彼にあがっていた。そして土俵を後にしていた。それで終わりであった。

「よくやったな」

親方が会心の笑みで彼に声をかけてきた。

「見事だったぞ」

「これが美香子ちゃんに届いているんですね」

「そうだ」

その言葉に頷いてみせる。

「その通りだ。手術はきつと成功する」

「そうですね。ただ」

だがここでもう一つの約束のことが頭の中に蘇ってきた。彼はそれを思い出し急に暗鬱な気持ちになっていくのであった。

しかしそれでも時間は動くのだ。無慈悲なまでに。そして手術は無事終了し赤龍は彼女と会うことになった。その日が近付くにつれ彼は塞ぎ込むようになってしまった。

## 第六章

何も言わず俯き腕を組んで座っている。そのまま何もせずただそこにいるだけであった。

「おい」

そんな彼に親方が声をかける。見るに見かねたのである。

「そんなに気にすることはないぞ」

「そうですかね」

彼はその言葉にすぐに応えることはできなかった。どうにも困った顔を続けていた。

「だったらいいんですが」

「顔のことだろ」

親方は彼に問う。

「それしかないな」

「わかりますか」

「わからない筈がないだろう」

「そう言葉をかける。」

「それ以外ないんだから」

「はあ」

珍しく覇気のない気弱な返事をしてきた。それだけで今彼がどんな精神状況なのかがわかる。

「まあ考えてもあれこれ言っても仕方ない」

「それはわかってますけれど」

「わかっていたらもうくよくよするな」

親方はまた言った。

「どっしり構えるしかないだろうが」

「そうですね」

「気持ちわかる」

親方は彼のことはわかっていて。だからこそ声をかけているので

ある。

「だがな。それでもだ。会っしかないだろうが」  
「ですよね」

赤龍はその言葉にも応える。それでも浮かない声であった。

「やっぱり」

「ここまで来たんだ。堂々といけ」

親方は発破をかけた。

「わかったな」

「ええ、じゃあ」

応えるしかなかった。親方もそうさせたのである。

「胸張っていきます」

「ああ、俺も一緒に行つてやる」

親方は彼の背中を守るつもりであった。彼が辛い時や壁に当たっている時はそうやっていつも見守つてきているのである。そうした意味で彼は赤龍にとっては親も同然の存在であったのだ。

赤龍は遂に美香子と会うことになった。その日が来て彼は袴を履いて彼女がいる病院に向かった。やはりそこには親方も一緒であった。

「部屋は知ってるな」

「はい」

赤龍は親方の言葉に応える。応えながら先へ二人で進み白い病院の中へ入った。

「お母さんに教えてもらいました」

「そうか。じゃあすぐに行つていいな」

「そうですね。面会の連絡の確認を取ってから」

「ああ。そうしよう」

事務室に話して確認と連絡を取ってもらった。そうした事前の用意も済ませてから美香子の側にと向かうのであった。

病室に二人で入る。そこは個室であり富子が立っているのがまず目に入った。そして背広の中年の男の人もいた。どうやら美香子の

父であるようだ。

「はじめまして」

「お久し振りです」

二人はそれぞれ赤龍と親方に挨拶をしてきた。男の人はこう名乗ってきた。

「美香子の父の智也です」

「お父さんですか」

「ええ。話は聞いています」

彼はこう述べてきた。

「娘の為に。有り難うございます」

「いえ」

赤龍は彼に対して言葉を返す。謙虚な声であった。

「そんなことはないです」

「それで娘に会いに来て頂いたんですね」

「ええ」

答える声が小さくなった。それを見た親方はそつと囁いてきた。

「気にするな」

美香子の両親に聞こえないようにそつと。ここでも彼を氣遣っていた。

「いいな」

「わかってますけれど」

「わかっていたらだ」

彼は言う。

「度胸を据えろ。いいな」

「わかりました」

その言葉に頷いた。そして美香子の両親に対して言う。

「では娘さんに御会いして宜しいですか？」

「ええ、勿論です」

富子が応えてきた。

「どうか宜しく願います」

「はい。それでは」

「美香子」

智也がベッドにいる少女に声をかけてきた。見れば何か寝ているようであった。

「横綱が来てくれたよ」

「横綱が？」

「うん、御前に会いに来てくれたんだよ」

彼は娘に対して優しい声で語り掛ける。その横で富子が赤龍に対して説明するかのように述べてきた。

「すいません、手術が終わったばかりで」

「はあ」

「あまり長い時間目を開けることはないんです。まだ慣れていませんから」

「そうなのですか」

「そうですね。今起きますので」

「わかりました」

赤龍はその言葉を受けて頷いて応えた。

「それでは今から」

「はい。お願いします」

運命の時であった。はじめて土俵にあがった時よりも横綱の襲名式の時よりも緊張していた。今まで生きてきた中で最も緊張していた。高校の相撲大会で優勝し鳴り物入りで角界入りした彼が。鬼も怖れぬとまで言われた彼が。今極端にまで緊張していた。

## 第七章

若し自分の顔を見て怯えたならばどうしよう、いやきつと怯える筈だ、この様な顔は。そんなことを考えながら今美香子と会うのであった。

美香子の前にやって来た。彼女は自分に顔を向けていた。そして今にこりと笑ってきた。

「横綱ですよね」

「そうだよ」

赤龍は無理をして笑顔を作ってそれに答えた。

「赤龍だよ」

「そうなんですか」

「うん。目、見えるようになったんだね」

「はい」

美香子はそのにこやかな笑顔で頷いてきた。

「見えます。横綱のお顔も」

「そう」

その言葉を聞いて寂しく、そして悲しい顔になった。それは美香子にも見えた。

「どうしたんですか？」

「いや、何でもないよ」

そう言って誤魔化すがそれでも心の中は違っていた。

「気にしないで」

「そうですか。それにしても」

「どうしたんだい？」

「横綱の目って凄く綺麗ですね」

「えっ」

美香子にそう言われて戸惑いを覚えた。はじめて言われた言葉であつたからだ。



「今何て」

「目が綺麗だなんて」

彼女はまた言う。

「綺麗な、この目が」

「ええ、とても」

「そうなんだ」

彼の目も怖いと言われていた。眼光鋭く威圧的だと。だが美香子は彼の目を見てこう言ったのである。

「怖くないのかい？」

あらためて彼女に尋ねた。

「この顔と目が」

「いいえ」

しかし美香子はその言葉に首を横に振る。静かだが確実に。

「そんなことはないです」

「そうなんだ」

「だって横綱の顔は」

彼女はそううで彼に言う。静かな、澄んだ声で。

「とても優しく笑っているから」

「笑ってる？」

「そうです、私に」

にこりと笑ってきた。その笑みが赤龍の目にも入る。するととても優しい気持ちになるのを彼も感じたのであった。

「それでそんなことは」

「有り難う」

赤龍はその言葉を受けてそう言葉を送った。

「そう言って貰えたのははじめてだよ」

「そうなんですか」

「うん、実はね。ずっとこの顔が怖いって言われてきたから」

それが今変わろうとしていた。彼もそのことを実感していたのであった。自分で。

「だから。凄く嬉しいよ」

「そうだったんですか」

「本当に怖くないんだね」

もう一度それを問う。

「おじさんの顔が」

「はい。心が見えますから」

「そうか」

「よかったな、赤龍」

後ろから親方が声をかけてきた。優しい笑みを浮かべてじつと彼を見ていた。

「彼女が見ているのはな、御前の顔だけじゃないんだ」

「はい」

「御前の心も見えているんだ。だから微笑むことができるんだ」

「そうですね。俺の心も」

「だって横綱私の為に勝ってくれたんでしょう?」

美香子は赤龍に対してまた言ってきた。

「そして今だって私に会いに来てくれて」

「うん」

「それでどうして怖いって」

「そうなんだね。何かそれを聞いて」

「嬉しいだろう」

親方がまた声をかけてきた。

「その言葉が」

「ええ」

赤龍はその言葉に頷く。涙こそ出なかったが感無量であった。

「横綱」

「何だい?」

美香子の言葉に顔を向ける。

「これからも応援していいですか?」

彼女はこう問ってきた。

「これからも横綱を。それでいつも見ていいですよね」  
「うん、いいよ」

彼は温かい言葉で答えた。普段の気迫はそのまま優しい心になっていた。

「これからもね。宜しく」

「はい」

美香子は明るい笑顔で答えてきた。それでもう充分であった。

「横綱、これからも」

「うん、宜しくね」

二人は優しい笑みを浮かべ合った。赤龍の不安は大きな杞憂であった。だがそれは大きな喜びへと変わった。そうした出会いであった。

素顔 完

2007・1・2

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9370b/>

---

素顔

2010年10月8日15時46分発行